

【環境外在論】と【主体-環境系論】

浅野慎一『人間的自然と社会環境：人間発達の学をめざして』大学教育出版、2005年

第I部 人間環境と自然・社会

第3章 【環境外在論】と【主体-環境系論】

《克服すべき「常識」》

環境とは、人間（主体）を取り巻く客観的な外界・外的諸条件である。環境問題を解決するには、そうした環境を客観的に分析することが大切だ。

【1. 環境外在論】

【環境外在論】：環境＝「主体（subject）」の外部にある「客観的（objective）」実在。

＝人間を外側から規定する外界・外的諸条件。

人間にとって主体的な働きかけの外的「対象（object）」。

→科学の課題・目的＝外在的な環境を対象化、客観的に分析・認識。

→諸科学の専門分化・細分化。

【環境外在論】の環境観・科学観＝因果関係の認識に基づく目的意識性・理性の獲得。

人間の進化の過程で創出。

①自然と人間の分離（文明の成立）

②中世的・神権的秩序の崩壊＝人間中心の文化。

③共同体社会の解体＝自我の確立＝社会と個人の分離。

生産力など人間の諸能力の発達→自然・文化・社会＝客観的な認識、意識的な制御・改造の対象・客体。

【環境外在論】の全面開花＝産業革命・市民革命（近代）以降。

近代＝「世界の客観化＝対象化」と「人間の主観化＝主体化」が表裏一体で急速に進行。

ハイデッガー¹⁾「世界は征服されたものとして、より包括的に、より徹底的に処理に任せられ、客観がより客観的になればなるほど、それだけますます主体的に、主体は立ち上がった。」

【2. 環境外在論の限界】

【環境外在論】：様々な限界が指摘。

①環境＝単なる客観的実在ではない。「主観的（subjective）」・内在的な意味世界でもある。

ex)環境としての多様な「海」。

「主体と環境／主観と客観」の統一的把握。

マルクス²⁾「私の対象は私の本質諸力のうちの一つの力の証でありうるにすぎず、したがってそれは私の本質諸力が主体的能力として自覚的に存在する限りにおいてのみ私にとって存在しうるにすぎず、或る対象の意味の範囲は私にとって、…ちょうど私のセンスの及ぶ範囲にほかならない。それゆえに音楽によって始めて人間の音楽的センスがよび起こされ、非音楽的な耳にとっては絶妙の音楽といえどもなんの意味をももたず、[どんな]対象でも[ない]。…一言にしていうならば人間的なセンス、諸センスの人間性もまたその対象の存在によってこそ、人間的にされた自然によってこそ、始めてでき上がるのだ…。主観主義と客観主義、唯心論と唯物論、能動と受動が社会的状態のなかで始めてそれらの対立、したがってまたそのような対立物としてそれらのあり方を失うことがわかる。〈ものの見方の上での諸対立そのものの解決はただ実践的な仕方でのみ、ただ人間の実践的エネルギーによってのみ可能であり、それゆえにそれらの解決はけっして単に認識の課題にすぎないのではなくて、かえって現実的な生活課題なのである。〉」

ミード→ブルーマー：象徴的相互作用論³⁾。環境＝主観的・主体的に状況定義された意味世界。

人間の社会的相互作用を通してたえず主体的に構成－再構成、生成－変化。

「自我」の能動的自己。「事物」と「対象」の区別。

シュッツ⁴⁾：現象学。外界を選択的に知覚し、意味として解釈する人間の主観性を重視。

現実＝自我・関心・問題意識を座標軸の原点として広がる生活世界。

& 相互主観的で理解可能な世界。「自然」なものと同様に自明視しがち。

日常的な生活世界に埋め込まれた自明性を疑わせ、覆す。

解釈的パラダイム：

ゴッフマン⁵⁾：ドラマトウルギー分析。対面的相互行為→暗黙のうちに駆使する方法・戦略。

社会秩序の維持、社会的自己の演出。変更の可能性。

ガーフィンケル⁶⁾：エスノメソドロジー。個別具体的な社会的文脈・状況下での相互行為に焦点。

人々が無意識のうちに用いる方法。日常性の基底にある暗黙の社会的意味。

ポスト構造主義：脱構築・分節／節合→近代社会・国民国家を視野に入れて把握。

記号論、カルチュラル・スタディーズ、コミュニケーション理論等、多様な展開。

BUT 主観性・主体性を重視する理論＝精緻化するほど、一面的になりがち。

マルクス：「主体と客体／主観と客観」の統一的把握。

ミード：客観的に実在する「事物」と人間によって意味づけられた「対象」を区別。

「対象」の意味＝人間の働きかけだけでなく、「事物」との相互関連の中で確定。

BUT 解釈的パラダイム・現象学等＝主観的・主体的な意味付与がリアリティをもつ日常生活の

相互行為に焦点。物質・自然、巨視的な歴史的な社会変動・変革への射程は希薄化。

②環境＝主体の外界・外的諸条件であるだけでなく、内界・内的諸条件でもある。

ex) 遺伝子・細胞レベルの生物的身体、価値規範や言語・知識・感性を内面化させた社会的身体。

ミトコンドリア＝独立した原核生物→真核細胞の中で共生。

人間＝自然や社会の営み・進化の産物。& 人間＝外界に働きかけ→内界・身体を変化。

ex) 消化器の中の食物、呼吸器・血管に取り込まれた酸素、人間の生存に不可欠な共棲菌。

外界と内界の単純な二分法＝無意味。

③主体と環境＝切り離して捉えられる固有の実在ではない。たえずの相互作用・連環→互いを改変。

ex) 森や山と人間の“共進化 (coevolution) ”。

【環境外在論】の限界を明示する事象としての「環境ホルモン (外因性内分泌攪乱化学物質)」

a) 生体内で内分泌系を攪乱する作用をもつ化学物質。

主体との関係性、主体にとっての意味に基づいて定義。

b) 外界・外的諸条件であるだけでなく、主体内部の内分泌系において機能する内界・内的諸条件。

c) 影響・作用＝主体の発生－発達段階によって変化。胎児と成人で差異。

d) 人工物質。BUT 自然の一部としての人間に影響。

e) 植物性エストロゲンと類似。エストロゲン＝人間が進化の過程で耐性を獲得。

免疫系＝自己と非自己に明確な境界線？

BUT 免疫系＝経験から学習、適応、コミュニケーションしあう細胞のネットワーク。

口に含んだ水、化粧、体内に埋め込まれたシリコン＝自己か？

自己免疫を起こす遺伝子＝非自己か？

【3. 主体－環境系論】

環境≠人間をとりまく客観的な外界・外的諸条件。

人間 (主体) と環境：メビウスの環 or 環境＝人間にとって「地平線」のようなもの。

主体と環境＝切り離せない一つの意味連関の過程。「主体形成 (人間発達) －環境形成」の動的な過程。

主体と環境の二元論を克服する視座：【主体－環境系論】。

マルクス⁷⁾「自然は人間の非有機的な体である。つまり、それ自体が人間の身体なのではないかぎりでの自然はそうなのである。人間は自然によって生きるということは、自然は彼の体であって、死なないうために人間はこの体といつもいっしょにやっつけていかなければならぬということである。人間の肉体的および精神的な生活が自然と繋がっているということは、自然が自然自身と繋がっていることを意味するものにほかならない。けだし人間は自然の一部だからである」。

今西錦司⁸⁾「生活するものにとっては主観とか客観とか、あるいは自己とか外界とかいった二元論的な区別はもともとわれわれの考えるほどに重要性をもたないのではなかろうか。生物にとって生活に必要な範囲の外界はつねに認識され同化されており、それ以外の外界は存在しないものにも等しいということは、その認識され同化された範囲内がすなわちその生物の世界であり、その世界の中ではその生物がその世界の支配者であるということではなかろうか。外界とか環境とかいう言葉を用

いるとよそよそしく聞こえるが、環境とはつまりその生物の世界であり、そこにその生物が生活する生活の場であるといってもいいであろう。…生活の場という意味は単なる生活空間といったものを指すのではなくて、それはどこまでも生物そのものの継続であり、生物的な延長をその内容としていなければならないのである。われわれはいままで環境から切り離された生物を、…生物と考えるくせがついていたから、環境といい生活の場といってもそれはいつでも生物から切り離せるものであり、そこで生物の生活する一種の舞台のようにも考えやすいが、生物とその生活の場としての環境とを一つにしたようなものが、それがほんとうの具体的な生物なのであり、またそれが生物というものの成立しているような体系なのである。「環境とはそこで生物が生活する世界であり、生活の場である。しかしそれは単に生活空間といったような物理的な意味のものではなくて、生物の立場からいえばそれは生物自身が支配している生物自身の延長である。もちろんこういったからといって環境は生物が自由につくり自由に変えうるものではないのである。環境をどこまでも生物の自由にならない、その意味において生物自身に対立するものと見るならば、その環境はわれわれの身体の中にまでは入り込んで来ているばかりではなくて、じつはわれわれの身体さえ自由につくり自由に変えることができないという点では、これを環境の延長とみなすこともできるであろう。生物の中に環境的性質が存在し、環境の中に生物的性質が存在するということは、生物と環境とが別々の存在ではなくて、もとは一つのものから分化発展した、一つの体系に属していることを意味する」。

【環境外在論】＝近代的な環境－科学観。

【主体－環境系論】＝現代的な環境－科学観。

自然環境破壊・核兵器開発：人間の目的意識的な自然改造→非人間的な形で進行

→自然の一部である人間の生命－生活（life）」を破壊。

貧困・飢餓、社会解体、戦争・テロ、差別：人間の協働関係としての社会

→人間の「生命－生活」を疎外。

矛盾・危機の臨界→自然・社会・人間の新たな統一・共生が緊急の課題。

新たな環境の形成、それを担う新たな主体の形成が要請。

∴ 求められる人間の新たな知≠主体のあり方と切り離された「環境」の客観的分析・その寄せ集め。

細分化された個別諸科学の分析によって得られた知見を、「主体形成（人間発達）－環境形成」を集約点として統合。＝個別諸科学が直面する限界を突破する新たな理論的挑戦。

マルクス⁹⁾「これまでのあらゆる唯物論の主要欠陥は対象、現実、感性がただ客体の、または観照の形式のもとでのみとらえられて、感性的人間的な活動、実践として、主体的にとらえられないことである」。

【4. まとめ】

《克服すべき「常識」》

環境とは、人間（主体）を取り巻く客観的な外界・外的諸条件である。環境問題を解決するには、そうした環境を客観的に分析することが大切だ。

NO! 人間（主体）と環境はメビウスの環のようなもので、両者を分けることは不可能・無意味。

人間にとって環境とは地平線のようなもの。

①環境＝主体（人間）によって捉えられた主観的・内在的な意味世界でもある。（主観と客観の統一）。

②環境＝主体（人間）の内界・内的諸条件でもある。（内界と外界の統一）

③主体（人間）と環境：相互連環・相互作用の中で互いを形成・変容。（弁証法）。

→主体と環境：切り離せない一つの意味連環の過程。

「主体形成（人間発達）－環境形成」の動的な過程。

＝【主体－環境】系論。（主体と環境の二分法・二元論の克服）。

主体と切り離された「環境」の客観的分析・その総合ではなく、

細分化された個別諸科学の分析で得られた知見を「主体形成（人間発達）－環境形成」を集約・統合。

＝個別諸科学が直面する限界を突破する新たな知的挑戦。

参照・引用文献

1) ハイデッガー, M. (1962) 『世界像の時代』 (桑木務訳) 理想社、85頁。

2) マルクス, K. (1975-a) 「1844年の経済学・哲学手稿」 (真下信一訳) 『マルクス・エンゲルス全集』 4

0巻、大月書店、462～463頁。

- 3) ミード, G. H. (1973) 『精神・自我・社会』 (稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳) 青木書店、同 (1990) 『個人と社会的自我』 (小川英司・近藤敏夫訳) いなほ書房、34・43・91～93頁、ブルーマー, H. (1991) 『シンボリック相互作用論』 (後藤将之訳) 勁草書房。
- 4) シュッツ, A. (1982) 『社会的世界の意味構成』 (佐藤嘉一訳) 木鐸社
- 5) ゴッフマン, E. (1974) 『行為と演技』 (石黒毅訳) 誠信書房、同 (1984) 『スティグマの社会学』 (石黒毅訳) せりか書房。
- 6) ガーフィンケル, H. 他 (1987) 『エスノメソドロジー』 (山田富秋他編訳) せりか書房。
- 7) マルクス, K. (1975-a) 「1844年の経済学・哲学手稿」 (真下信一訳) 『マルクス・エンゲルス全集』 40巻、大月書店、436頁。
- 8) 今西錦司 (1974) 「生物の世界」 『今西錦司全集』 第1巻 講談社、56～57・67頁。
- 9) マルクス, K. (1963) 「フォイエルバッハにかんするテーゼ」 『マルクス・エンゲルス全集』 3巻、大月書店、3頁